

るのだ。」と思ったとあります。最後の一キロはそのトラックさえ故障して、足をひきずるように夜道を歩きながら「こんなところで人が生存できるのだろうか。」と考え続けたと聞きます。

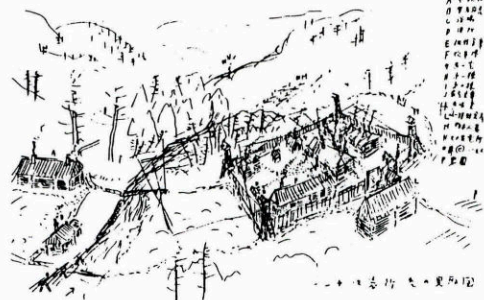
また大便も小便も排せつと同時に凍り、手袋なしで金属にさわると皮膚がはりついで、無理に引っばると皮膚

がはがれるほどの寒さで、「あの寒さ、あの疲労、あの絶望感、これだけはいくらこ

とばを積み重ねても体験しない人には決してわかってもらえないだろう。」と『私のシベリヤ』にも書くほどセーヤは酷寒の流刑地なりました。

ラゲール（収容所）での最初の冬は暗く長くみじめで、寒さと過労と飢えて二五十名

中三十名が死亡し、四ヶ月後に作業できる者は五十名くらいに減っていたのです。先生の労働は森林の伐採、薪作りで、朝八時に起き、コー



セーヤ収容所見取図

向い合ってエゾ松の太木を二日ばかりで切り倒すのです。

深い雪の中での伐採作業は、栄養失調の抑留者にはこの上ない重労働でした。これらをモチーフに、『シベリヤ・シリーズ』の「伐」「鋸」（一九六四年制作）という二枚絵ができます。

セーヤでは毎日のように仲間が死んでいきました。日本の土を踏むこともなく異郷に無念の死を遂げた仲間も哀れだが、帰国を待ちわびている

ふるさとの家族もかわいそうでなりません。先生はかじかむ手で涙をぬぐいながら、苦しんだもののみが死に見出すことのできた崇高な安らぎの表情を写しとり、ときには生き残った者

は死者たちをうらやましいとさえ思いました。「彼らの靈魂は肉体を離れ、われわれより先にふるさとの日本に飛んで帰ったにちがいないとも思っ

た。こんな思いを描いたのが『涅槃』（一九六一年制作）と『雪』（一九六三年制作）です。「雪」は毛布にくるま

れた遺体から靈魂が抜け出し、通夜に集った戦友たちに別れを告げながら、ふるさとの向って飛び立とうとしているところを描いた作品である」と『私のシベリヤ』の中にあります。

また先生は絵を描くだけでなく造形家でもあります。抑留地セーヤでの作業のあいま

には万能ナイフをとり出して松の枝でスプーンを作り、ガラスの破片で丹念に磨き、「日本に帰ったらこのスプーンで黒豆の煮たのをすくって

腹いっぱい食べてやろう」とどと考えたそうです。出征前に制作された木彫の「せみ」は小さいながらも彫

刻家高村光太郎の仕事を想わせるものがあり、他にも自作のオモチャがアトリエでたくさん制作されています。

昭和二十一年五月、先生（抑留者）たちに移動命令が

です。セーヤからシーラまで三昼夜歩いて、そこからトラックでさらに奥地の炭鉱町

チェルノゴルスクへの移動で初夏の陽光を浴び、星空をおぎ、道辺の草を食べながらの行軍でした。日本に向って帰る移動では

なかったが、永い冬のラーゲルから解放される旅のようでもあったのです。この時の様子を次のように書き残されています。

「ゲートルを巻き、外套を着ているので初夏の日ざしは暑かった。汗がにじんだ。道々

食べられそうな草を見つけると引き抜いてパクついた。ノドがかわくと、水たまりや小川の泥水をむさぼり飲んだ。夜は地べたにゴロ寝した。昼間は暑いぐら



飯 盒

は冷えこんだ。背のうを枕に体を地面に投げだすと、大地の凹凸がじかに感じられた。目をあけて空を見ると、降るような星空だった。三日三晩歩いてシーラの街に入った。街に入るときにソ連兵は我々に列を組み歌を歌うように命じた。民衆に日本の捕虜が決して虐待もされず元気でやっているのだということを示そうとでも思ったのだろうか。しかたなしに軍歌を歌った。なんの感興もなかった。むしろ、こんなに元気がない歌声を聞かせたところで、かえって我々のみじめな様子を示すだけではないかとさえ思えた。」（『私のシベリヤ』より）この時の様子を描いたのが「列」（一九六一年制作）という作品です。